

洗足祭が9月16日・17日におこなわれました。台風の接近が心配されましたが、何とか無事開催することができました。70回目となる今年の洗足祭特別企画として、阿川佐和子氏による講演会も開催されました。

本校では、高校二年生を中心として実行委員制で文化祭が運営されています。部門長のFさんの感想を紹介いたします。



高2 Fさん

私の長い洗足生活で最後の文化祭。

私は文化祭実行委員展示・貸出部門長として、また、高二Aの一員としてこの文化祭に参加しました。二十九年度洗足祭は、去年の文化祭終了と同時に始まりました。展示部門にとって一番大きな課題は、洗足祭の楽しさを残しつつ、文化面の多い企画を各団体にいかにすすめてもらうかでした。企画書の返却では部門のメンバーと話し合い、いかに文化的方面に持っていかを提案しました。企画書段階で不安の多かった団体が日を進めるごとに成長していくのを感じることもでき、とてもやりがいを感じました。

難しかったことは、すべてに対して平等に接するということです。私の部門は対象となる団体数が一番多く、それぞれにもととの距離感や相手の態度も、学習状況も異なるため、全く平等というのは不可能なことでした。そんな中で自分も相手も納得のいく基準を決めてラインを引くのは大変困難なことでした。そして文化祭が近づくと貸出の仕事が立て込んできます。数の計算や見過ごしなど自分にミスはないか、限られた時間の中で本当に回るのか、貸出に関しては目の前のことが不安でしょうがありませんでした。毎日帰路につくたびに一日ミスがなかったことに安心し、次の日のことが就寝前に不安になる毎日の連続でした。結果、大きな問題もなく終わることができたのは自分のこの心配性な性格が功を奏したのだと思います。

そして長かった準備期間もあけていよいよ洗足祭当日。私の主な役割は展示団体の評価、公演団体への貸出、クラス・文化祭実行委員としてそれぞれのシフトでした。私は校内をゆっくりと回り、お客様が展示団体の展示を見て楽しそうに、興味深そうにしている場面を見かけたこと、洗足生が心地よさそうにもてなしている場面を見かけたこと、同級生の最後の公演を見届けられたことが何よりもうれしかったです。文化祭実行委員は縁の下の力持ちです。洗足祭を過ごす全ての人が気持ちよく過ごせるように準備、手助けをすることが一番の仕事です。そんな前向きな気持ちで過ごすうちに、皆の良いところが自然に目につくようになりました。とても心が温かくなった二日間でした。

こうして振り返って思うことはいろいろありますが、自分はこの期間に本当にたくさんの人に支えられました。部門の仲間、後輩、先生方、大変だろうと気遣ってくれる友人。感謝を伝えたいです。縁の下の力持ちといいましたが、結局は支えて支えられてだと思えます。今は無事終わられた安心感のほうが強いですが、じわじわと最後の文化祭が終わってしまった切なさを感じています。高二A組も飲食団体賞を取れてよかったです。素敵なクラスだと思います。

